

Four Elements vol.4 “Earth”

小菅 優

ピアノ・リサイタル

YU KOSUGE PIANO RECITAL

Program

ベートーヴェン:

バレエ「森の乙女」の
ロシア舞曲の主題による変奏曲 WoO 71

シューベルト:

幻想曲 ハ長調 D760 「さすらい人」

ヤナーチェク:

ピアノ・ソナタ 「1905年10月1日・街頭にて」

藤倉 大:

Akiko's Diary

ショパン:

ピアノ・ソナタ第3番 口短調 op.58

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲リサイタル・録音の偉業を達成
2017年始動の四元素をテーマとする新リサイタル・シリーズ最終章!

2022年 9月17日 土 13:30開演
[13:00開場]

FFGホール [福岡市中央区天神2-13-1]

一般 5,000円 / 学生 2,000円 (全席指定・税込)

※未就学児入場不可 ※学生(大学生以下)は入場の際、学生証をご提示ください。

■エムアンドエム 092-751-8257 (平日10時~18時 / 通信販売のみ)

■チケットぴあ <https://t.pia.jp/> / 《Pコード: 220-432》

■ローソンチケット <https://l-tike.com/> / 《Lコード: 85146》

お問い合わせ: NASAコーポレーション 092-714-2727

(平日10:00~17:00)

【主催】産経新聞社 / NASAコーポレーション 【協賛】マダムJゴルフ倶楽部
【後援】福岡市 / 九州朝日放送 / エフエム福岡

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策をとって開催いたします。ご来場の皆さまのご協力をお願いいたします。



Four Elements vol.4 “Earth”

公演特設サイトはこちらから▶▶▶



安心できる演奏を楽しむために
「新型コロナウイルス接触確認アプリ」COCOA
のインストールを推奨しています。



Four Elements vol.4 “Earth”

小菅 優 (ピアノ)

YU KOSUGE, PIANO

Profile

高度なテクニックと美しい音色、深い楽曲理解で最も注目を浴びているピアニストの一人。9歳より演奏活動を開始し、2005年ニューヨークのカーネギーホールで、翌06年には、ザルツブルク音楽祭でそれぞれリサイタルデビューを行い、大成功を収めた。

これまでにドミトリエフ、デュトワ、小澤、ワグネル、オラモ、ノット等の指揮でベルリン響、フランクフルト放送響、シュトゥットガルト放送響、BBC響、NDRエルプフィル、サンクトペテルブルク響、フィンランド放送響、フランス放送響、スイスロマンド管等と共演。10年ザルツブルク音楽祭で、ポゴレリッチの代役としてヘレヴェッヘ指揮カメラータ・ザルツブルクと共演。12年、紀尾井シンフォニエッタ(指揮:T.フィッシャー)のアメリカツアー、またシェレンベルガー指揮カメラータ・ザルツブルクの日本ツアーに参加しモーツァルトのピアノ協奏曲全8曲を共演。13年、服部義二指揮ウィーン室内管と共演、ウィーン・デビュー。また10年より15年まで、東京、大阪でベートーヴェンのピアノ・ソナタ全曲演奏会(全8回)を行った。さらに現在はソロだけでなく室内楽や歌曲伴奏を含むベートーヴェンのすべてのピアノ付き作品を徐々に取り上げる新企画「ベートーヴェン詣」に取り組んでいる。

録音は、ソニーから発売している『ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ全集』をはじめ数多い。2022年 5月、ライオン・ウィグルスワース指揮BBC交響楽団との新譜をソニーからリリース。

第13回新日鉄音楽賞、04年アメリカ・ワシントン賞、第8回ホテルオークラ音楽賞、第17回出光音楽賞を受賞。14年に第64回芸術選奨音楽部門 文部科学大臣新人賞、17年に第48回サントリー音楽賞受賞。2017年から4年にわたり、4つの元素「水・火・風・大地」をテーマにしたリサイタル・シリーズ『Four Elements』を開催し好評を博した。

Message

「この大地に縛られたままの 爽やかに力を出し、飛び出せ！
頭と腕は明るい力と共に どこでも故郷にする私達が太陽を呼べば
どんな悩みもなくなる」

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(1749-1832)
「さすらいの歌」より(「ヴァルヘルム・マイスターの遍歴時代」から)

Four Elements最終回のテーマは「大地」です。

今まで、生命にかかせない「水」や「火」、そして魂などの見えないものに焦点をあてた「風」をテーマにプログラミングをしていきましたが、これらはほとんど人間そのものに近づいています。今回の「大地」は、森、緑のような「生」を感じる作品、土にかえるとも言える「死」、そして人それぞれの原点を形作ったかけがえのない故郷をもとに、ピアノ音楽の骨格ともいえる作品の数々をお聴きいただきたいと思います。

ベートーヴェンの抒情的で優美な『「森の乙女」による変奏曲』は、ベートーヴェンと同世代の音楽家ヴラニツキーのバレエ「森の乙女」のシンプルで美しいテーマに基づいています。

そしてシューベルトの有名な「さすらいの幻想曲」。オーストリアの牧歌的な美しい風景をよく散歩したであろうシューベルトのこの作品は、一見決然として生き生きとしていますが、19世紀前半において世間から切り離され、常に故郷を探し求め、さまよい続ける人間の孤独感、終生幸福をつかめなかったシューベルトの悲劇も感じます。

ヤナーチェクのソナタ「1905年10月1日・街角」には歴史的な背景があります。これはハプスブルク家の君主制に対する民俗復興運動の中、殺されてしまったチェコ人の若い青年への追憶のために書かれた作品なのです。「予感」と「死」という2つの楽章に分かれていて、その残酷な悲劇への思いがドラマチックに語られます。

広島原発による放射線の余波によって命を落とした19歳の少女の日記を音楽で綴った藤倉大さんの「明子の日記」は、悲しい背景があっても、ただセンチメンタルにならず、この少女の純粋さのように美しく、でも心に突き刺さるような大さんならではの素晴らしい音楽です。

そして最後に演奏するショパンの集大成とも言える3番のソナタでは、故郷を離れ、ついに死が訪れるまでそこに帰ることのなかった彼の心情、メランコリーや憧れが語られた後、最後にまぶしい希望の光が射します・・・

Four Elements(水、火、風、土)から連想させられる美しさや残酷さは、人生そのものを反映しているように感じました。

今改めて、このプロジェクトを始動するときに引用した、エンペドクレスの「四元素は「愛(ピリア)」によってひとつの宇宙となり、「憎(ネイコス)」によって離散する、それらはすべて——過去、現在、未来——の源である」という言葉を思い出します。この宇宙を保つためには、「憎」ではなく、私たち人間一人一人が「愛」を齎さないといけない。そうすれば、絶対に希望があるはずだと信じられるのです。

小菅 優